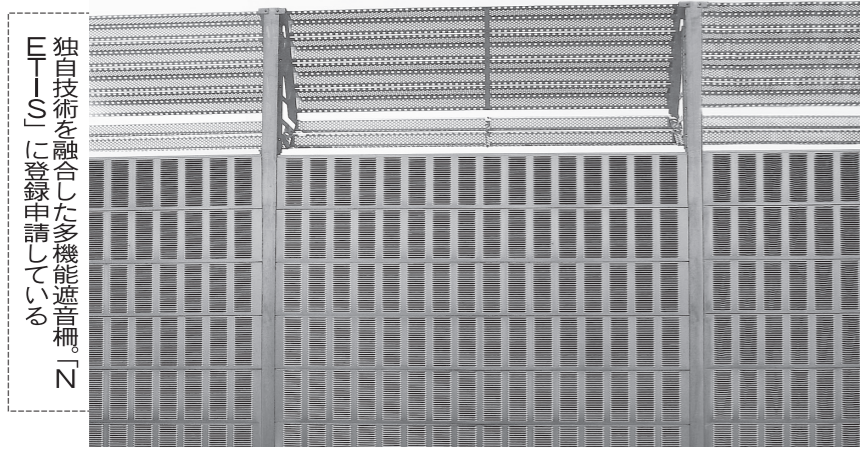


防雪柵のトップメーカーである理研興業(小樽、柴尾耕三社長)とJFE建材(東京、大出直文社長)はこのほど、多機能遮音柵を共同開発したことを発表した。業界初となる本製品は、双方が長年培った独自技術を融合し、製品化に成功。国土交通省の新技术情報システム「NET-ITS」に現在申請中で十一月中に登録される見込みだ。



独自技術を融合した多機能遮音柵「NET-ITS」に登録申請している

業界初

遮音、防雪、防風機能を一体化

遮音壁は道路からの騒音を防ぐために設置される柵で、道路路肩

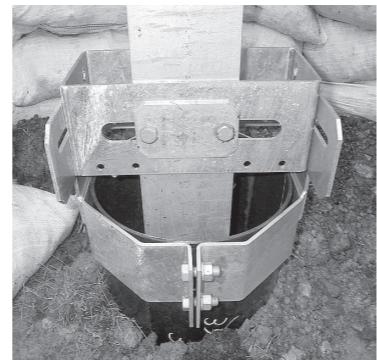
近傍に設置されるのが一般的。一方、防雪防風柵は雪による吹き溜まりや視程障害を防止する柵だが、柵の上端から剥離する渦が停滞し、柵の風下側に雪が溜まるのが想定されるため、柵高さの二倍程度路肩から離して設置するのが望ましいと言われている。

理研興業は風洞実験設備を所有しており、剥離する渦の低減を目標に長年にわたり研究してきた。柵の上端に風上側に斜めに傾けた刃を返しを設け、その上端に風下側へ傾けた

理研興業とJFE建材

多機能遮音柵を共同開発

術である。これにより、柵からの渦による吹き溜まりは発生しないため路肩近傍に設置することが可能だと技術担当者は言う。



支柱「ZIG」なしで必要としない溶接を必要とする「ZIG」

また、吸音板をスリム化し軽量化に成功。背面は完全フラットにし、今後は着雪軽減状況の確認を行う。吸音板をひし形状にし端部を斜めにかットした形状とすることで、上に配置する吸音板をくさびのように圧着させ、吸音板の固定を可能にした。素材も腐食しづらい高耐食性めっき鋼板を採用する。

両社は、既設の柵にも改良できる方法を検討している。理研興業では、上端の屈曲した刃を返しと誘導部を別ユニット化し支柱をH形鋼そのものにユニットを装着することで従来の吸音板の落としこみによる吸音板の配置を可能にした。

さらには、遮音効果、また誘導部を設置。そこには無数の穴を空けた鋼板を配置し、刃を返し部分の穴を空けた鋼板からすり抜けた風雪を一度ぶつけさせ弱い風雪の流れをつくり、柵上端以上の早い風の流に吸い寄せさせる。圧力の差をうまく活用した技

でも従来はモンケンによる打設が一般的であったが、理研興業が考案したパイプロハンマー打設用パイロチャッキング金具を用いた工法も同時に提案する方向である。現在、理研興業では、東日本大震災を機に、地震が起きても緩まない耐震用緩み防止ホルトを単独で開発中だ。

「これからは、今まで以上に高精度・高性能な製品開発に努力することにも、付加価値の高い商品を開発し提案していくことが、製造メーカーの義務であると考えています。また、防雪・防風・遮音の三機能を同時に兼ね備えた「多機能遮音柵」は別々に施工するよりも高いコストメリットがあり、施工性やメンテナンス性、また景観性にも優れており、もっとも時代のニーズに対応できる新製品だと思っております」と担当者。

十月二十四日、二十五日に、震災後約二年ぶりとなる「E東北」が夢メッセやぎで開催された。両社は共同施工や大型スノーポール、ゴルフ場のネット柵の施工に広く用いられている。

鋼管の打ち込み作業に関し、Yonにより積極的なPR活動を行い好評を博した。